



大庄中だより

令和6年 12月 25日

尼崎市立大庄中学校

校長 徳山 壮一 No.15

さあ! 明日から 冬休み



いよいよ13日間の冬休みが始まります。冬休みには、『正月』という節目があります。『1年の計は元旦にあり』のことわざとおり、過ぎた1年を静かに振り返り、来るべき新年の目標を定め、計画を立てるのに最適な休みです。学習面・生活面・体力面のそれぞれに目標を定め、その達成のために頑張ることのできる冬休みにしましょう。3学期 始業式に『いい目』『いい顔』の皆さんと再会できることを心から楽しみにしています。

始業式 令和7年1月8日(水)

3年生の皆さん・・・行事はもちろんのこと、すべてのことに対して、常に学校の主役としてリーダーシップを発揮し、後輩の見本となるべくよく頑張りました。冬休みはじっくりと腰を落着けて学習する最後のチャンスです。皆さんは、素晴らしい力を持っています。自分の力を信じて、自分の可能性を信じて、小さな努力を積み重ね、夢・目標を叶えましょう。

2年生の皆さん・・・3学期、いよいよ皆さんの時代がやってきます。3年生の先輩が築いてきた伝統を引き継ぎ、学校の主役としての活躍を期待しています。皆さんなら必ず素晴らしい学校の主役になれると信じています。

1年生の皆さん・・・自分自身をしっかり見つめ、自分の行いを振り返りましょう。4月には、後輩が入学してきます。3学期、中学生としてのさらなる成長と活躍を期待しています。皆さんには、無限の可能性が広がります。



チーム大庄の活躍

○第10回近畿中学校少林寺拳法大会

男子1年生単独演武 川瀨琥輝 4位

女子2・3年生組演武 田口巴菜・西崎もも 6位

女子団体演武 4位

岩城里咲 西崎もも 田口巴菜 井上凜花
矢野来実 松浦虹瑚 北浦百恵 小寺絢子



○第40回兵庫県中学校ソフトテニス新人大会

伊東栞奈・吉川緋彩 個人戦出場

○第67回北摂学校剣道大会 団体戦 ベスト16

川瀨琥晟 光永隆来 佐伯昊春 満田隆心

鈴木魁琉 熊澤叶夢



一日(冬)一善

生徒の皆さんは、『一日一善』という言葉を知っていますか？この言葉には、「一日にひとつだけいいから、誰かのために善いことをしましょう。」という意味があります。大きな事をする必要はありません。汚れている場所を掃除してあげる。友達に勉強を教える。困っている人に手を貸してあげる。洗濯物を取り入れてあげる。など。小さな事でいいのです。生徒の皆さんのまわりには、すぐにできる「善いこと」がたくさんあります。そして、『一日一善』を心がけると、どうなると思いますか？誰かのために善いことをした時、「ありがとう」という言葉が生まれます。「ありがとう」は、自分の心と人の心を和ませる魔法の言葉です。『一日一善』を心がければかけるほど、たくさんの「ありがとう」が生まれてきます。たとえ、だれも見えていなくて、誰も気づいてくれなくて「ありがとう」の言葉が生まれなくても「善い事をした」という満足感・充実感は、自分の心を豊かにします。そこで、校長先生から生徒の皆さんへの冬休みの宿題です。明日から始まる冬休み、『一日一善』を心がけて下さい。ただ、『一日一善』は大変だという生徒の皆さんは、ぐっとゆるやかに「冬休み一善」あたりでどうでしょうか。略して『一冬一善』。ぜひチャレンジしてください。そして、「ありがとう」があふれる家庭・学校になること、皆さんの心が豊かになることを願っています。12月25日 2学期 終業式 校長講話

第43回中学生人権作文コンテスト最優秀賞

『自分らしく』 宮寄穂乃香

「あ〜イライラする！考え方が古いねん！」と言いながら、私はソファに身を投げた。私がこんなにイライラしているのは、何気ない祖母が発した一言が原因だった。その日は、部活から帰り、シャワーを浴びた後、テレビの前であぐらをかいて座っていた。すると、祖母がこう言った。「女の子なんだからそんな座り方したらあかん。正座かお姉さん座りにしなさい。」私は、「女の子なんだから」という言葉に引っかかり、「別に良くない？誰も見てへんねんから。」と返した。すると、祖母が不機嫌そうに「そういうところからちゃんとしなさいとお嫁に行かれへんよ。」と言った。「は？嫁なんかいかんし。」と思った。これが原因で前述したような状態に至ったのだ。私は祖母の考えを否定したいのではなく「女の子らしさ」という基準で比べられるのが嫌だった。そんな中、私はあるテレビCMを目にした。「『子どもが熱を出したので有給取らせてください。』『わが社の経営方針を発表します。』聞こえてきたのは、男性の声ですか。女性の声ですか。無意識の偏見に気づくことから始めませんか。」しまったと思った。なぜなら、私は見事に前者を女性、後者を男性の声だと思ったからだ。私は、性別の基準で比べられるのが嫌だと思っているのに、その性別の基準で判断していた。女性は家で家事や子どもの世話をすべきだとか、男性は外で働くべきだという古くさい考え方が私の中にも存在した。自分の考えの狭さ愚かさを突きつけられた。しかし、それと同時に私はきっかけをもらったとも感じた。最近の社会では、ジェンダー平等の動きが広がっている。私の身近なものだと、学校の制服で女子がスラックスをはけるようになったり、男子でもかわいい物を持っているのが普通になってきている。だが、社会には、生きてきた時代や風習の違い、私が持っているような無意識の偏見がそれを邪魔していることがある。例えば、男女の賃金格差は縮小傾向にあるが、2021年時点で、日本はG7の中で最下位である。出世も男性の方がしやすい。私の母も、母の職場で男性の方が偉そうにしていることがあり、「私の方が仕事できるし！」とよくビールを飲みながらぼやいている。それを聞いて、私が大人になった時、女だから、男だからという理由で業務の内容が変わったり、偉そうにされたりするのは嫌だと感じた。それに、著名人による差別発言も多い。2007年、当時の厚生労働大臣が「女は子どもを産む機械」と発言した。これを知った時は、とても腹が立った。女性にも人生を選ぶ権利があって、子どもを産むも産まないも自由なはずなのに。社会には、このような考え方が深く根付いていて、取り除くことは難しい。だから、女性だから、男性だからという考えが、あらゆるところに転がっている。それを少しでも減らすために、私たちにできることは、ジェンダー平等のことについて理解することである。女性だから、男性だからという自分の基準で押しつけないようにすることだ。そうすることで、みんなが過ごしやすい「自分らしく」いられる社会になると思う。ジェンダー平等への理解を深め、社会を変える力になりたい。